但馬皇女「標結へ我が背」考

古川大悟

はじめに

萬葉集巻二に、但馬皇女による相聞三首が載る（一一四～一一六番歌）。[1]

但馬皇女在二高市皇子宮一時思二穂積皇子一御作歌一首

秋田之　穂向乃所縁　異所縁　君尓因奈名　事痛有登母

勅二穂積皇子一遣二近江志賀山寺一時但馬皇女御作歌一首

遺居而　恋管不有者　追及武　道之阿廻尓　標結吾勢

但馬皇女在二高市皇子宮一時竊接二穂積皇子一事既形而御作歌一首

人事乎　繁美許知痛美　己世尓　未渡　朝川渡

本稿で問題とするのは傍線を付した歌（一一五番歌）である。現行諸注では「後れ居て　恋ひつつあらずは　追ひしかむ　道の隈廻に　標結へ我が背」と訓まれる。但馬皇女と穂積皇子はともに天武天皇の子であり、何らかの事情で穂積皇子が近江の崇福寺へ遣わされた際に、[2]残された但馬皇女が詠んだ歌である。後に残って恋い焦がれているよりは、いっそ追いかけて追いつこう。道の曲がり角に標を結ってくださいあなた、といった意である。拙稿（二〇一八）でズハの語法とムが共起する特殊例としてこの歌に言及したが、歌の内容を詳細に論じるには至らなかった。本稿は、その後の稿者の研究内容も踏まえ、改めて当該歌の解釈を明確に示すことを目的とする。

第一節　論点整理

最大の論点は、結われる標は何のための標かということであ

る。すなわち但馬皇女は何を望んでいるのかという点が問題である。主に三つの可能性が指摘されている。

［A］標は皇女が後を追うための目印であり、皇女は追ってゆく道しるべを示してほしいと願っている。[3]

［B］標は皇女の進入を拒む通せんぼの標であり、皇女は追ってゆくことを止めてほしいと願っている。[4]

［C］標は皇女の安全を願う標であり、皇女は追いかける道中の安全を思いやってほしいと願っている。[5]

季吟・契沖以来の通説は［A］であり、しばしば

大伴の遠つ神祖の奥つ城は著く標［之米］立て人の知るべく　（一八・四〇九六　家持）

を根拠として、標が標識としての機能を持ち得たことが説かれる。それに対して浅見徹氏が提起した［B］説は、女が男に追いつくことは死・破滅と等価であって、「追ひしかむ」という思いは反実仮想でなければならない[6]という重要な着眼を持つ。そこで標は、常陸国風土記（行方郡）の麻多智の物語などに見られる原義通り、棒状のものを地上に立てて進入の禁止を示すものと捉えられ、皇女の後追いを防ぐものとされる。確かに標の用例に道しるべという意味は見出されず、先掲の家持歌の標も決して人を誘うものではなく、元来は人の進入を防ぐ目的であるはずなのである。［C］説は、井手至（二〇〇四）の隈をめぐる考察に発する。その要点は次の通りである。萬葉集に、

百足らず八十隈坂に手向せば過ぎにし人にけだし逢はむかも　（三・四二七　刑部垂麻呂）

とあるように、隈は他界と接する場、異郷との境界であると考えられる。『延喜式』巻三（臨時祭）には、

蕃客送レ堺神祭……右ハ蕃客入朝、迎二畿内ノ堺一、祭二却送神一。其客徒等、比レ至二京城一、給二祓麻一、令レ除乃入。

障神祭……右ハ客等入京、前二日、京城四隅為二障神祭一。

とあり、異郷からの邪悪なものの侵入を防ぐために、境界に神が祭られたことがわかる。井手氏によれば、右の「障神」の依り代は木の杖桙であり、「玉桙の道の隈廻」（五・八八六）といった表現も、境界神の依り代としての霊桙に関連するという。こうしたことから、道の隈廻に標を結う行為は、異郷との境界にあたる場に、邪悪なものの侵入を防ぐ禁忌の目印を設けることで、追ってくる皇女の通行の安全を図る手立てであると説かれている。

以上のような問題に対しては、標の用法の検討のみならず、例えば「命令形＋我が背」の形式を持つ類例との比較に基づいた綿密な読解が求められるであろう。しかし先行論ではもっぱ

ら但馬皇女の人物像が重視され、そうした読解が十分になされてこなかったように見受けられる。但馬皇女は、題詞からも様々に想像される恋愛物語とあいまって、強烈な愛情と個性をもつ人物として理解されてきた。それゆえに、反実仮想を形成するはずのズハにマシではなく意志のムが共起することの特異性や（後述するようにムが反実仮想に関与することは実はそれほど異例ではない）、集中他に例のない「標結へ」という表現の切迫感が注目され、それらが直ちに但馬皇女の意志の強さといった人物像へと結びつけられる傾向にあった。

但馬皇女の個性は、例えば当該歌前後の「君に寄りなな」「朝川渡る」といった表現については首肯される面もあるが、[7] 当該歌の解釈にも同様の理解を持ち込んでよいのかという点は、別に検証しておく必要がある。高野正美（一九六三）は当該の一一五番歌について、実はごく一般的な類型に基づく面があるということを指摘した貴重な論である。[8] ただし、特に結句「標結へ我が背」について、類歌との内容的な比較考察が十分になされるには至っていない。節を改めてその考察を試みたい。

第二節　「命令形＋我が背」

結句に「命令形＋我が背（子）」という形式を持つ歌は、当該歌を除いて集中に六例ある。[9] そのうち二例は、

①真木の上に降り置ける雪のしくしくも思ほゆるかもさ夜問へ我が背［佐夜問吾背］　（八・一六五九　他田広津娘子）

②雁がねの初声聞きて咲き出たるやどの秋萩見に来我が背子［見来吾世古］　（一〇・二二七六）

のように、男の来訪に対する期待の表現である。そのほかに一例、坂上大嬢が家持に縵を贈った際の歌として、

③我が業なる早稲田の穂もち作りたる縵そ見つつ偲はせ我が背［師弩波世吾背］　（八・一六二四　坂上大嬢）[10]

があり、男が自分のために何かをしてくれることを願うという意味では、①・②に類する。先行研究は主に「標結へ我が背」を、後を追ってしまうであろう私のことを慮って標を結ってほしいという意味で解してきたが、これは以上のような類歌との関連において当該歌を位置づけたものと理解される。

他方、「命令形＋我が背（子）」の結句を持つ残りの三例は、次のように愛する男の無事や安全を願うものである。

④楽浪の連庫山に雲居れば雨そ降るちふ帰り来我が背［反来

吾背」　（七・一一七〇）

⑤つぎねふ　山背道を　他夫の　馬より行くに　己夫し　徒歩より行けば　見るごとに　音のみし泣かゆ　そこ思ふに心し痛し　たらちねの　母が形見と　我が持てる　まそみ鏡に　蜻領巾　負ひ並め持ちて　馬買へ我が背［馬替吾背］

（一三・三三一四）

⑥信濃道は今の墾り道刈りばねに足踏ましなむ沓[11]はけ我が背［久都波気和我世］　（一四・三三九九　東歌）

以上の三例は夫が旅路にあるという点で、当該歌と文脈を共有している。「標結へ我が背」は、安全祈願の標という井手氏の指摘を踏まえれば、男に対して、どうか曲がり角に標を結って安全に行ってくださいと願う表現であると考えられないであろうか。本稿が主張したいのはこのような解釈である。

さらに命令形ではないが、男への呼び掛けには

⑦事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひ我が背［莫思吾背］　（一六・三八〇六）

という例もあり、男を思いやる女の思いを表現しているという意味で④～⑥に通じる。また、結句ではないが「命令形＋我が背（子）」の句を持つ歌は集中に一〇例あり[12]、その中には、やはり相手の無事や健康を願うものが三例見られる。

⑧夕闇は道たづたづし月待ちていませ我が背子［行吾背子］その間にも見む　（四・七〇九　豊前娘子大宅女）

この歌は帰路の安全を願いながら、それ以上に、長い時間逢っていたいという思いに主眼があるように見える。先掲の④～⑥にしても、安全を願うことはまた無事に逢えるということにつながるのであり、逢うことを期待する①・②のような例とも重なりを持ちうる。本節での分類は便宜にすぎないということになるが、さしあたっては男の安全を願うことがおのずから、共に長く時を過ごしたいという女の愛情表現でもありうるということが重要である。

⑨天地の神に幣置き斎ひつついませ我が背な［伊麻世和我世奈］我をし思はば　（二〇・四四二六　防人歌）

ここでは、男が自分の無事を祈ってくれることと、女である私を思ってくれることとが表裏一体である。その意味で、③（偲はせ我が背）のような例との連続性が窺われるものである。またこの歌は、幣を置くという行為が、本稿で問題としている標を結うという行為に性質上類似するようにも思われる。「標結へ我が背」が仮に男の無事を願う表現であるとすれば、実のところその願いは［C］説で見たような、私のことを思ってくださいという願いにも通じうることがわかる。この意味では、本

稿が主張しようとしている解釈は［C］説のヴァリエーションとして位置づけられることになる。

⑩あぢさゐの八重咲くごとく八つ代にをいませ我が背子［伊麻世和我勢故］見つつ偲はむ　（二〇・四四四八　橘諸兄）

これは丹比国人の邸宅での宴席歌であるが、「我が背子」とあるように、相聞の形式を踏襲する面がある。末永く元気であることを祈って「我が背子」と呼びかける形式が、相聞の一つの類型をなしていたことを証する例であろう。

本節では「標結へ我が背」が皇子の無事を願う呼び掛けである可能性を提起した。次節ではさらに、当該歌の前半の表現を分析し、こうした読解を支持するさらなる根拠を示したい。

第三節　反実仮想

本稿では反実仮想という用語を、助動詞マシの意味を表す文法概念としてではなく、既に実現済みの現実事態に反する、実現不可能な事態を仮想するという表現論的な意味で用いる。[13]

三・一　ズハの語法と反実仮想

小柳智一（二〇〇四）に説かれるように、特殊語法ズハは例外なく反実仮想の表現を形成する。集中のズハの語法二八例のうち、一九例がマシと共起することも象徴的である。例えば

かくばかり恋ひつつあらずは［不有者］高山の磐根し枕きて死なましものを　（二・八六　磐媛皇后）

は、恋ひつつある現実に反する恋ひつつあらぬ状況を仮想し、そのような状況を実現しうるのならば、いっそ死んだ方がよい――実現済みの状況を今から変更するなど原理的に不可能であるが、そうした仮想をしてしまうほどに現状が苦しい――という歌である。[14] ズハの語法のこのような特質は小柳氏論文によって広く知られたが、「恋ひつつあらずは」については、夙に牧野正文（一九九〇）によって類する指摘がなされている。牧野氏は当該歌について、

これまで見てきた例［引用者注「恋ひつつあらずは」の諸例］よりすれば、この「追ひ及かむ」という表現も、実現不可能な願望として捉えるべきではなかろうか。つまり、相手に追いつくことが現実には不可能であるという前提を、その根底に看取する必要がありはしないか　（一八頁）

と述べる。[15] 通せんぼの標という浅見徹氏の説（［B］説）も理解を同じくする。追いつくことはあくまで仮想であるという前

提があれば、無事に追いつくための標を結ってほしい（[A]説・[C]説）という歌にはならないはずなのである。

ここで一つの誤解を解いておきたい。当該歌の第三句「追ひしかむ[追及武]」には、マシではなくムが用いられている。それゆえに反実仮想ではありえず、現実的な意志を表すとしか解釈できないのだという理解がしばしばなされる。追いつくための道しるべを望むという解釈にはこのような理解が伏在しており、強い意志を持つ女性という従来の但馬皇女像とも親和性が高い。しかし、ムも反実仮想の表現を形成する。次項ではその用例を詳しく検討したい。[16]

三・二　ムが反実仮想に関与する例

ズハの語法とムの共起例は当該歌以外に二例ある。

⑪剣大刀諸刃の上に行き触れて死にかもしなむ[将死]恋ひつつあらずは[不有者]（一一・二六三六）

⑫住吉の津守網引の浮けの緒の浮かれか行かむ[将去]恋ひつつあらずは[不有者]（一一・二六四六）

死を仮想する⑪は、マシを用いた先掲の磐媛皇后歌と類似する。⑫の「浮かれか行かむ」は「得干蚊将去」と記され、代匠記初稿本の「得干はうかれとよむべし」という指摘に従った訓である。浮かれ行くとは、『全注』（巻十一は稲岡耕二氏執筆、一九九八年）のように「本籍地を離れて浮浪する」という説もあるが、平城宮址出土木簡の「津玖余々美宇我礼□」（「月夜好み浮かれ」の意か）[17]を踏まえれば、浮かれ歩くこととも考えられる。いっそこの場から逃れ去りたいという主旨であれば、

言繁き里に住まずは今朝鳴きし雁にたぐひて行かましものを〈一云「国にあらずは」〉（八・一五一五　但馬皇女）

という、ズハ～マシの歌も想起されよう。これは但馬皇女作とされるが、巻八に収録され、子部王作という別伝もあって、後人の仮託であるとも考えられる。[18]⑪・⑫とも、実現済みの現実に反する状況（「恋ひつつあらず」）を仮想し、もはや変更しえない既実現状況を変更するための極端な手段に思いを致すものである。表されている内容自体は、マシが用いられた歌と多分に類似するのである。

なお、⑪・⑫とも係助詞カを伴っているが、当該歌の「追ひしかむ」はカを伴わない。躊躇なく言い切るような表現であるという点では、当該歌は確かに個性的である。ただし、カを伴わないことが、仮想でない現実的な意志の表明であることの根拠となるわけではない。

⑬玉ならば手にも巻かむ[将巻]をうつせみの世の人なれば

手に巻き難し　（四・七二九　坂上大嬢）

は、実際には手に巻き難いという言明を伴うことからも明らかなように、ムが反実仮想を構成する例であり、「玉ならば手に巻き持ちて恋ひざらまし［益］を」（三・四三六　河辺宮人）のようなマシによる類歌との近接性も窺われる。このように非情物への化成を願うことは、

願為二西南風一　長逝入二君懐一

（『文選』巻二十三　魏・曹植「七哀詩」）

のような漢籍からの影響も考えられ、漢文訓読ではマシでなくムが用いられたことが関係するのかもしれない。いずれにせよ、ムはマシと部分的に重なりを持ったと考えられ、

⑭我が背子は玉にもがもなほととぎす声にあへ貫き手に巻きて行かむ［由可牟］　（一七・四〇〇七　家持）

⑮母刀自も玉にもがもや頂きてみづらの中にあへ巻かまく［麻可麻久］も　（二〇・四三七七　防人歌）

といった類例に加え、玉への化成とは異なる文脈でも、

⑯……家ならば　かたちはあらむ［阿良牟］を　恨めしき妹の命の　我をばも　いかにせよとか　にほ鳥の　二人並び居　語らひし　心そむきて　家離りいます　（五・七九四　憶良）

⑰児らしあらば二人聞かむ［将聞］を沖つ渚に鳴くなる鶴の暁の声　（六・一〇〇〇　守部王）

のような反実仮想の例が見られる。

当該の一一五番歌は、ズハの語法の用例が例外なく反実仮想に偏ることとの整合性を考えれば、まさに今から皇子に追いつこうという現実的な意志を表すものとは理解しがたい。恋いつつある状況を今さら変えることは不可能であるが、もしもこの状況を変えられるというのなら、皇子に追いつくという無謀な事態までも仮想されてしまうという歌であろう。なお、「追ひしく」ことが無謀とされる背景については、第四節で述べる。

三・三　「追ひゆく」ではなく「追ひしく」であること

第三句「追及」はかつて「追ひゆかむ」と訓まれてきたが、契沖が異を唱えたことで「追ひしかむ」の訓が採られるようになった。「及」字は当該歌を除いて集中に四十一例あり、「しく」あるいは「まで」としか訓まれない。さらに契沖が根拠としたのは、

山城にい及け［伊辞鶏］鳥山い及け及け［伊辞鶏之鶏］吾思ふ妻にい及き［伊辞枳］逢はむかも　（仁徳紀）

であり、「しく」とは追いつく意であることがわかる。漢語の「追

及」の例は、

工尹商陽與二陳弃疾一、追二呉師一及レ之。陳弃疾謂二工尹商陽一曰、「王事也。子手レ弓而可」。手レ弓。「子射レ諸」。射レ之斃二一人一、韔レ弓。（『礼記』檀弓下）

老父已去、高祖適従二旁舎一来。呂后具言、客有レ過、相二我子母一皆大貴。高祖問、曰「未レ遠」。乃追及、問二老父一。老父曰「郷者夫人・児子皆以レ君。君相貴不レ可レ言」。（『漢書』高帝紀上）

及二漢兵起、更始立一、豪桀多薦二挙禹一、禹不レ肯レ従。及レ聞三光武安二集河北一、即杖レ策北渡、追及二於鄴一。光武見レ之甚歓……（『後漢書』鄧寇列伝）

のように追い至る意であって、単に追いかける意ではない。[19] 契沖が説いたように「追ひしかむ」という訓が正確であろう。

従来「追ひゆかむ」という訓が広く受容されてきたのは、久松潜一（一九五三）が指摘するような磐媛皇后歌との類似性が意識されたためではないか。

君が行き日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ［迎加将行］待ちにか待たむ　（二・八五　磐媛皇后）

関連する軽大郎女歌については第四節で述べることにして、右の磐媛歌は、離ればなれになった男のもとへ向かうことを発想するという点で当該歌と類似している。しかし、「追及」が「追ひゆく」ではなく「追ひしく」であることからすれば、改めて両歌の異なりが注意される。当該の一一五番歌は、磐媛歌のように今から向かおうかと考えるのではなく、一足飛びに、追いかけた結果として追い至ったという状況を思うのである。唐突に結末の状況のみを想像するという極端なあり方は、やはり当該歌が、今からしようとすることの意志表明とはいえないことを傍証するように思われる。

三・四　上三句の主旨と下二句への接続

このように「追ひしかむ」が反実仮想であるとすると、上三句の焦点は一見、追いつくことが叶わない現実を嘆くことにあるように思える。だが相聞の文脈での反実仮想は、そのような現実への絶望とは異なる表現性を持つ。例えば「恋ひつつあらずは死なましものを」とは、死ねずに恋い苦しむことへの絶望よりも、死を仮想してしまうほどの激情であるという、愛情の程度を訴えることに主眼がある。そのことは、次のような笠女郎の歌々を想起すれば理解しやすいであろう。

朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく恋ひ渡るかも　（四・五九九　笠女郎）

思ひにし死にするものにあらませば千度そ我は死に反らましし

（四・六〇三　笠女郎）

五九九番歌では、死にそうなほどであるという程度表現をベシが形成している。六〇三番歌は、恋の想いのために死ぬことがあるとすれば、私は千回でも死を繰り返すほどである、それほどに激しい恋心を抱いているという意味である。千という数が想いの程度の大きさを物語る。すなわち、こうした相聞の文脈での反実仮想は、現実に抱く情意に対する、印象的・個性的な程度強調の表現として機能するのである。「玉ならば手にも巻かむを」という仮想表現によって、一時も離れることなく近くにいたいという思いが、玉として手に巻くことができたならと思ってしまうほどに甚だしいものであることが鮮烈に印象づけられる。同様に当該歌の上三句は、追い至り得ないことへの嘆きを訴えるのではなく、追いついてしまおうという無謀な仮想をしてしまうくらいに愛していることを意味しており、穂積皇子への愛しさを最大限に伝える表現であると考えられる。

本稿が主張する下二句の解釈は、標を結って安全に行ってくださいと皇子の無事を願うというものであった（第二節）。右に見たように、上三句が皇子への愛しさの表明であるとすれば、下二句でその無事を思いやることへと整合的に接続されると思われる。これだけ愛していますからどうか無事で行ってくださいということである。本稿の主張はこれでほぼ整ったが、次節では当該歌との類縁性が指摘される記紀の物語について付言しておく。

第四節　軽太子・軽大郎女の物語との関連

但馬皇女歌と記紀との関連を初めて指摘した研究は、久松潜一（一九五三）である。[20] 允恭天皇の皇子皇女である軽太子・軽大郎女が密かに心を通わせ、軽太子が伊予へ配流されると、軽大郎女がその後を追い、古事記には二人で自死したとある。日本書紀では皇子が大前宿禰の家で自決し、軽大郎女は伊予に流されたと記され、筋が異なる。当該歌は特に古事記歌謡との近接が説かれている。次に示す歌謡a・bは日本書紀にはなく、歌を詠んだ「衣通王」とは軽大郎女である。[21]

其の衣通王、歌を献りき。其の歌に曰はく、

a 夏草のあひねの浜のかき貝に足踏ますな明かして通れ

［阿加斯弓杼富礼］

故、後に亦、恋ひ慕ふに堪えずして、追ひ往きし時に、歌ひて曰はく、

b君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには
待たじ〈此の山たづと云ふは、是今の造木ぞ〉[22]
（記允恭）

この後、軽大郎女が軽太子に追い至り、共に自死するという結末へと続く。こうした物語の存在からすれば、浅見徹氏が指摘したように、女が男に追いつくことは、死と等価であるほどの無謀な行為として了解されていたであろう。このことからも但馬皇女歌の「恋ひつつあらずは追ひしかむ」は、今から追っていこうという内容に焦点があるのではなく、「恋ひつつあらずは死なましものを」と実質的にほぼ等しいように思われる。

先に引用した歌謡a・bに着目したい。久松氏論文では、当該の但馬皇女歌とbとの類似性が指摘されている。bは三・三で示した磐媛皇后歌と大部分の詞句を共有しており、後に残っているよりも男のもとへ向かいたいという意味で、但馬皇女歌の「追ひしかむ」と同じ発想であるとされる。確かにそのような類似は認められるが、本稿の立場からすれば、但馬皇女歌に一層近いと考えられるのはむしろaではないか。暗闇での足元は危険だから夜が明けるのを待って行きなさいと、愛する男の無事を願い、同時に相手を引き止めようともするのであり、

信濃道は今の墾り道刈りばねに足踏ましなむ沓はけ我が背
［久都波気和我世］（一四・三三九九　東歌　⑥の再掲）

のような歌と発想を同じくするのみならず、

桜麻の麻原の下草露しあれば明かしてい行け［令明而射去］
母は知るとも（一一・二六八七）

に通うことも諸注によって説かれている。

従来、bの「待つには待たじ」といった焦燥の表現が、磐媛歌の「待ちにか待たむ」との対照において注目され、情熱に駆られた行動的な性格を現すといった評へと結びつけられがちであった。しかし、悲恋の物語はaのような思慮深い気遣いの歌とともに語られたということがむしろ重要であろう。軽大郎女という悲劇の女性は、一方では細やかな思いやりを持ったけなげで一途な人物として、いわば造型されている。[23]但馬皇女の人物像についても同様のことが省みられてよい。当該の一一五番歌の前後には、

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りなな言痛くありとも（二一・一一四）
人言を繁み言痛み己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る（二一・一一六）

といった歌が配され、これらは確かに、逞しく行動を起こす情熱的な皇女という通念に適う人物像を喚起しうるようにも思わ

れる。しかしそうした歌の間に「標結へ我が背」という、思いやりがそれ自体一途な愛情表現でもあるような歌が入るからこそ、一連の歌々は切なさを伴う恋物語として成立しうるのではないのか。

恋物語と言ったが、それは歌の享受者（萬葉集編纂者も含む）の立場からの謂であり、皇女自身が軽大郎女を意識し、自己を物語の人物に同一化して作歌したなどと証する手立ては決してない。但馬皇女の歌々を読む者は、軽太子・軽大郎女の物語を髣髴とさせるような恋物語として、それを受容したであろうと主張するにすぎない。浅見徹（二〇〇四）では特に第一期・第二期の古い歌について、必ずしも作者自身の心情を推すという方向性ではない、別な研究態度の必要性が述べられている。

万葉集（全二十巻完揃でなくともよいし、万葉集の名さえまだ無い状況でもよい）の編者が、どのようなものとしてその歌をこの万葉集という書物の中に採り入れたか、この歌集を読んだ当時の人たちがどのような状況を想い浮かべながらどんな歌としてこれを受け止めたか、つまり、作者というよりは作品を、そして読み手の立場を重視すべき場合があるのではないか　（四六～四七頁）

右の指摘は、かつて伊藤博（一九五九）が、前代の相聞歌をロマンスとして享受する「宮廷サロン」という場を想定したこととも通底する。「標結へ我が背」という呼び掛けは、少なくとも萬葉集編纂当時の享受者には、軽太子の道行きを思いやる軽大郎女の姿と重ねて捉えられ、但馬皇女の一連の歌々が構成する恋物語の切ない一場面として受容されたであろう。そして、但馬皇女自身の作歌背景を実証することはできないにせよ、前節までに見たような類想歌との整合性を考慮すれば、「標結へ我が背」という句はまさしく軽大郎女の「明かして通れ」と同様に、穂積皇子の無事を願う表現としてあり得たものと思われる。

おわりに

当該の一一五番歌は、次のような意味に解釈される。

後に残って恋い焦がれているよりは、いっそあなたに追いついてしまいたいほどです（それほどに愛しています）。道の曲がり角に標を結って、無事に行ってくださいねあなた。

従来の［C］説は、皇女という他者の安全を祈って皇子が標を結うものと解していたが、本稿の立場では皇子が道中で自分

自身のために標を結い、無事を祈願することになる。このような例には、井手至（二〇〇四）に挙げられるように、

君が代も我が代も知れや岩代の岡の草根をいざ結びてな

（一・一〇　中皇命）

岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む

（二・一四一　有間皇子）

があり、旅人が自らの平安を祈ることがあり得たことがわかる。

今後の研究ではさらに、但馬皇女作とされる他の歌々とのあいだで、当該歌がどのように位置づけられるのかを考える必要がある。それはまた、但馬皇女の人物像と当該歌との関係を一層明確化するということでもある。例えば中世のように、作歌者に関する記録が多数残されている時代であれば、それに基づいて当人の人物像を推定することが可能であろう。しかし萬葉集の古い作歌者の場合は、その人物像を歌集内部でしか語り得ない場合がしばしばある（題詞や左注もあくまで歌集の中の記述である）。個々の作品の訓詁を基礎としつつ、それらをいわゆる「歌群」といった観点で捉えることを通じて、歌集内に措定された作歌者の人物像を描き出すという方法を採らざるをえない。歌集である以上は編纂者が介在するため、現実の作歌者の在り方というよりも、編纂者によって解釈された作歌者の人物像を追求することになる。ここにやはり、萬葉集編纂者が古歌を享受した場のようなものを、原理的にであれ、想定しておく必要が生じるであろう。それは但馬皇女歌の読解に限らず、例えば巻十六に載るような特異な歌々に対して、編纂者は何を見ていたのかといった問題にも通じる観点であると思われる。

付記

本稿は、JSPS 科研費 22J00132 の助成を受けた成果を含む。

注

（1）萬葉集の引用は井手至・毛利正守『新校注　萬葉集』（和泉書院、二〇〇八年）による。

（2）史書に記載はない。但馬皇女は高市皇子と懇ろな仲であったと見られ、穂積皇子との恋が露見して、皇子が崇福寺へ遣わされたとも説かれる。三者の年齢については、「四十歳に近い高市皇子に愛されていた但馬皇女が、二十歳前後の穂積皇子に心を奪われた」（稲岡耕二氏全注）、「但馬皇女は二人の皇子の間の年齢、どちらかといえば穂積の方に近く、つまり幾つか年上であった」（内田賢徳（二〇二二））という推定がある。本稿は和歌表現に即した読解を主旨とし、こうした背景はさ

しあたり問わないものとする。

（3）主な注釈書では、拾穂抄、代匠記、童蒙抄、萬葉考、略解、古義、桧嬬手、安藤新考、美夫君志、井上新考、口訳、講義、全釈、総釈、金子評釈、窪田評釈、全註釈、佐佐木評釈、私注、旧大系、澤瀉注釈、旧全集、集成、全訳注、全注、和歌大系、新大系、全歌講義、全解がこの［A］説を採り、ほぼ通説となっているといってよい（ただし全解は「邪霊を封じ込めるための結界。それが目印の役目も果たす」と述べており、［C］説にも関わるか）。

（4）浅見徹（一九九〇・一九九九・二〇〇四）。新編全集がこれに従う。古注では岸本由豆流の攷證がこれに近く、「君は、それ［皇女が追ってくること］をうるさしとおぼすべし。さらば、道のくまぐまに、標引わたして、わがこすまじきやうに、へだてし給へと、すまひていへる意也」と述べる。なお、神永あい子（二〇〇一）は進入禁止の標とする点で共通するが、「自分と穂積皇子との世界に他者が入り込む事の無いようにして欲しい」と述べる点で独自である。

（5）井手至（二〇〇四、初出一九七九）を発端として、岡内弘子（一九九六）、坂本信幸（二〇二〇、初出二〇〇一）、蝦名翠（二〇〇七）がこの説を支持する。注釈書では、釈注が「私の分もこめて道隈の神を祭っておいてほしい」とする。

（6）浅見氏と結論は異なるが、反実仮想であるという点は牧野正文（一九九〇）にも指摘がある。三・一で詳述。

（7）類型からの逸脱については神永あい子（一九七七）、畠山篤（一九七八）に詳しい。

（8）廣岡義隆（一九八五）は、当該の一一五番歌が類型的発想の歌であることと、前後の歌とは題詞の形式が異なることから、当該歌は但馬皇女の作ではなく、第三者による仮託であるとしている。その当否はここでは保留するが、前後の歌とはやや異質に見えるという点は確かに注意されてよい。

（9）存疑例として「大舟の上にし居れば天雲のたどきも知らず歌乞我が背」（一七・三八九八）があるが、訓が定まらず、ここでは除外した。

（10）「穂もち」は諸本で「穂立」と記されるが、「立」を「以」の誤字と見る説により、「穂もち」とする。

（11）西本願寺本は「安思布麻之牟奈」であり、元暦校本の本文によって校訂している。

（12）歌番号は、四九一、七〇九、一九三一、二九四九、三四四五、三七五一、三七七八、四四二六、四四四八、四五〇四。

（13）近年、神経科学や心理学をはじめとして広く注目され

ている理論に「自由エネルギー原理」があり、とりわけ期待自由エネルギーの議論の中で「反実仮想（counterfactual processing）」という語が用いられることがある。その場合の「反実仮想」は、いわば可能性のある（起こりうる）未来のシミュレーションのようなプロセスを指しており、本稿の用法とは全く異なる。和歌表現の反実仮想はむしろ、今となっては取り消し不可能な現実に対して、あえて背反することを想像するという意味で、実現の不可能性にポイントがある。なお不可能ということについては注（15）でも関説している。

（14）ズハの語法の特質が理解しやすいよう、ここでは典型例として磐媛皇后歌を引いた。これ以外の例として、当該歌と同じ「後れ居て」の句を持つズハの語法の例（三例）を示しておく。「後れ居て［後居而］恋ひつつあらずは［不有者］紀伊の国の妹背の山にあらましものを」（四・五四四　笠金村）、「後れ居て［於久礼為天］長恋せずは［世殊波］み園生の梅の花にもならましものを」（五・八六四　吉田宜）、後れ居て［後居而］恋ひつつあらずは［不有者］田子の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る」（一二一・三二〇五）。いずれも、後れ居て恋ひつつある現実に反するような事態を想像しており、マシと共起して反実仮想の表現を形成している。類歌には、「後れ居て［於久礼為弖］恋ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを」（一四・三五六八　東歌）がある。

（15）「不可能」という語の用法に注意を要する。小柳氏は、既に実現済みの（あるいは実現しつつある）事態は原理的に変更不可能であるという意味で「不可能」という語を用いる。一方牧野氏は、「～まし」などの表現で志向される事態が、到底実現しえないものであるという意味で「不可能」という語を用いる。牧野氏の用語法は、望まれる事態の質をどう捉えるかという点に解釈者の恣意が入り込むおそれがあり、あまり有効ではない（拙稿（二〇一八）の用語法も同様に有効でない点を含んでいたものと反省する）。しかし、そもそも変更不可能なこと（例えば既実現の恋いつつあるという事態）を変更するための十分条件として「死なまし」などと願望すると考えれば、願望の対象は結局現実の変更にあり、それははじめから原理的に実現不可能であるともいえる。そうした理解のもとに本稿は牧野氏の主張を継承する。

（16）拙稿（二〇一八・二〇二三）でも関説しているが、論点は異なる。

（17）ヨの甲乙や「我」の清濁については議論の余地がある。

（18）内田賢徳（二〇二二）。

(19) 「追」「及」それぞれの字義については、『説文』に「追、逐也」「及、逮也」とあり、『篆隷万象名義』には、「追」は「送也、救也、随也、雕也、堆也」、「及」は「至也、連也、辞也、逮也」とある。

(20) その後記紀歌謡との関わりを本格的に問題としたものに、畠山篤（一九七八）、岡内弘子（一九九六）、蝦名翠（二〇〇七）があり、また浅見徹氏の一連の論考の中でも折にふれて衣通王の物語に関する言及がある。

(21) 記紀それぞれの述作意図については、内田賢徳（一九九二）第三章第二節「挽歌的なものと相聞歌」を参照。なお古事記で軽大郎女に与えられる「衣通王」の名は、日本書紀では「衣通郎姫」と記され、允恭の皇后である忍坂大中姫の妹（允恭に寵愛された）に与えられる名である。

(22) 山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集　古事記』（小学館）の本文による。一部表記を改めた。

(23) 内田賢徳（一九九二）、特に二七三～二七七頁を参照。

参考文献

浅見　徹（一九九〇）「標結へ我が夫」『松田好夫先生追悼論文集　万葉学論攷』続群書類従完成会
浅見　徹（一九九九）「但馬皇女の歌」『セミナー万葉の歌人と作品　第一巻　初期万葉の歌人たち』和泉書院
浅見　徹（二〇〇四）「「標結へ我が夫」再説」『萬葉』一八七
井手　至（二〇〇四）『遊文録　説話民俗篇』和泉書院（「上代における「隈」の初出は「万葉人と「隈」」という題で『萬葉集研究　第八集』塙書房、一九七九年）
伊藤　博（一九五九）『萬葉集相聞の世界』塙書房
稲岡　耕二（一九七七）「但馬皇女の歌」『明日香』四二・一～二（合併号）
犬養　孝（一九七七）「但馬皇女の歌」『万葉集を学ぶ　第2集』有斐閣
今西　英麻（二〇〇〇）「『万葉集』巻二・但馬皇女歌群考―採録の方法と歌の背景との関係―」『古代中世国文学』一五
内田　賢徳（一九九二）『萬葉の知』塙書房
内田　賢徳（二〇二二）「天平綺譚　万葉集巻十六の意匠」『萬葉』二三三
蝦名　翠（二〇〇七）「但馬皇女・穂積皇子「歌物語」考」『国語と国文学』八四・一
大久間喜一郎（一九六七）「川を渡る女―但馬皇女をめぐっ

て―」『國學院雑誌』六八・一〇
岡内　弘子（一九九六）「但馬皇女御作歌三首」『伊藤博博士古稀記念論文集　萬葉学藻』塙書房
賀古　明（一九六六）「但馬皇女と穂積皇子との恋」『国文学』一一・一三
神永　あい子（一九七七）「但馬皇女論―物語性をめぐって―」『青山語文』七
神永　あい子（二〇〇一）「「標結へ我が背」―但馬皇女が望んだもの―」『青山語文』三一
川上　富吉（一九七三）「但馬皇女と穂積皇子」『萬葉集講座第五巻』有精堂
黒沢　幸三（一九七八）「穂積皇子と但馬皇女」『文学』四六・九
小柳　智一（二〇〇四）「「ずは」の語法―仮定条件句―」『萬葉』一八九
坂本　信幸（二〇二〇）『万葉歌解』塙書房（「標結へ我が背」の初出は『叙説』二九、二〇〇一年）
志位　孝子（一九八一）「但馬皇女の恋歌」『万葉集必携Ⅱ』学燈社
高野　正美（一九六三）「但馬皇女論」『上代文学』一五
竹嶋　麻衣（二〇〇七）「恋歌の伝承―但馬皇女と穂積皇子の恋―」『国文研究』五二
畠山　篤（一九七八）「但馬皇女の恋歌―発想と物語的性格―」『國學院雑誌』七九・三
久松　潜一（一九五三）「記紀歌謡と初期萬葉」『萬葉』六
廣岡　義隆（一九八五）「但馬皇女と穂積皇子の歌について―「言寄せ」の世界―」『人文論叢』二
古川　大悟（二〇一八）「上代の特殊語法ズハについて―「可能的表現」―」『萬葉』二二五
古川　大悟（二〇二三）「助動詞ムの意味―意志から推量へ」『国語国文』九二・二
牧野　正文（一九九〇）「但馬皇女歌群の物語世界―一一五番歌の考察を中心に―」『美夫君志』四〇
森　斌（一九七九）「但馬皇女歌の特質―万葉集巻二・相聞三首について」『広島女学院大学国語国文学誌』九

（ふるかわ　だいご／日本学術振興会特別研究員）